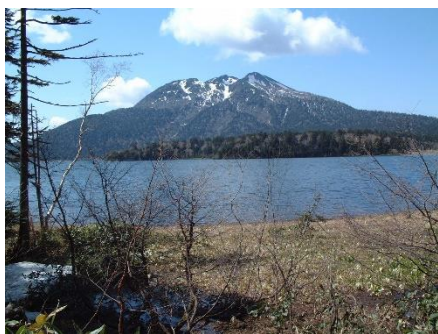




檜枝岐溫泉觀光協會提供

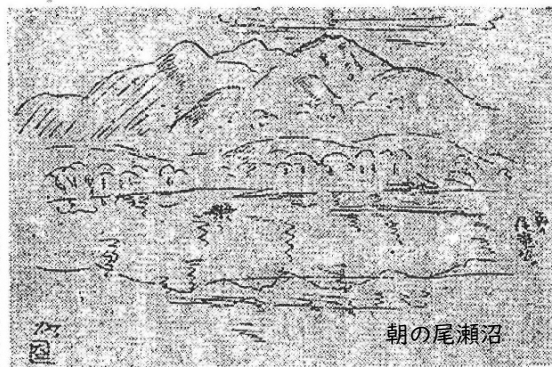


檜枝岐温泉觀光協會提供



檜枝岐溫泉觀光協會提供

第五信 七月二十九日
午後六時、馬の籠鳴きに目を
ます。空は晴やけ、お天気が
別腹によい。旗仕度をして、文部
省撮影館のカママンに誘はる。
この隊長カママンは日本山岳會
事務定規次郎氏で既に尾瀬沼へ
は十八日から遊ばしてゐる。其
さんが（平野長成氏の長男）
「ほら槍の槍に寫があるよ」
といふ、なるほど槍がある、寫
は二三年前からこゝへ來てゐる
といふ。昨夜を曉んで夜更け
まで物語りを續けた時にも、槍の
寫が出たつた。
●七時四十分長成小島を舟で



朝の尾瀬沼

南會の神秘

る探を境秘

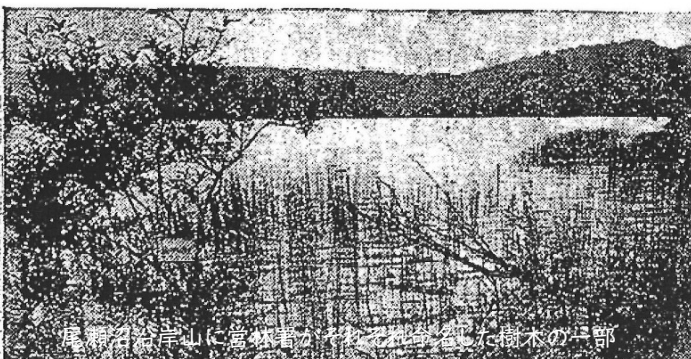
途上點描

郎次金林小 文
三大 田熊 書

出て沼尻へ渡る。同行七人だが牛ば簀を出てから禪師の弟子さんを置いてとけぼりにしたことを想ひ出したが既に遅い。約五十分で割鶴の峰へ登りわたる。湖を渡る。岸邊には「三ツ淵」「氷砥草」「ちんさい」が波にゆられ、揺られてゐる。こゝより登々湖の庵までは草花の一面に咲はこる湿地である。

● 根本に足附を二つくればいよく登山口。こゝに湖の荷を捨て、こゝでもやはり雪がとけりに鳴き、道のかたわらは水芭蕉の花が一尺も長い。握りこぶしを握り上げてゐる。麓の登山道は登山靴の大塚の上を越つてゆくの、太舌の生えた滑つこいこの深路はまことに危い。

● 行く手には白樺の木が並び、かかり岩の掬削りに分たなければならぬ。十四時十分、氷砥の着火口に置く。約百五十歩、路の側尺とも知れぬ程、氷、雪が越つてゐる。こゝで私は「昨日の校校校の校舎、校舎『星又次』」の事を書かねばならない。氏は依然として今日もペイコットである。今年五十歳であると言つて居るがどうして、仲人、禪師では、乃木將軍の部下として日露戦役に於ける功勞者であつたやうだ。雪を思ふ程分喰ひつゝ、頂上へ登る。正に十時五十分。



尾瀬沼も岸山に常緑雪がそそり寄附した樹木の一部

◆大氣は誠に中分ない登山日
晴だが懐いかな、富士も日本海
も遠くすることができなかった
欲いて登つてくる人々は丁度十
九人の中には洋服の婦人が一
人、襦袢をほころばせてゐた。

◆隙には銅鑼りの小屋の鳴
にぞく々神話が託つてある森に

からまれつゝ途につけば
『おからばなやまほんの
き』が道に響くも『う
そ』が鳴いて麓に下りて
羹食を齎る、末なりの養
むすびのうまりかへる縁
の難治も早やる心持。こ
こより麓の壑を越えて戸



瀬平へ向ふ。この瀬地は海潮の如く水をふくみある所は全く乾までも泥の中へ洗んでしまふ。又またこのころは一度この水へ入れば再び出ることも度きなければ又これを救ひあけることも出来得ないといふ恐ろしい泥沼もある。然しこの瀬地には桃色の花、黄色の花、それらがバナヤの如く顔がつてゐるのである。

◆こゝを越えれば再び林に入る。この林の道は又どろどろと丁度雨の如く灰色のぬかりである。



草鞋もゲートルも見え
になつてしまふ。三時
森の奥に一息してふか
き付く。『福島民報』
一九三一、七、一
星、熊田、小林」と。

◆これは、約八丁で四三へてゐる右は學校飯・左は片品料より戸倉へ、私たちはまつ直ぐ西へ進み長崎建造の無煙船舶所小坂を過ぎて大瀬原へ入つた。その其の美しき野の風情、それは神秘と云ふ言葉では到底満足に表現することは出来得ない、全くそれは地上の天国である。取りも無し燕子の群、無數に咲き散れる千草の花、それは奈良の病を慰はせるものだ。

◆あゝ乙女らよ、君たちはこの天地を知るや、貴族生らよ、君らはこの天国を知りや、一度この大原野の花の中に君たちを放つたらば君たちの胸の悲しみは忽ち救はれるかもしれない。こゝは穢しきローマンスの世界ではない、こゝには純然無垢な自然の愛着が君たちを抱擁してくるのである。

◆午後二時十分　東京電報株式會社々々々々　著く。こゝは總ての旅館が露地居り我々の食膳をにぎはし且我々の夜の安眠のために供與へられた饗宴は、まだ私たちの味はひ得ない上等のものであつた。

かくて夜は來り瀨原の霧の月に染はれ鳴き飽める。
昨日掲載分「カーキ色の燕子草」とあるは「……日光黄並草」のこと。「……花」とあるは「……さんざん花」と訂正

檜枝岐溫泉觀光協會提供



三條ヶ瀧の壮観

る探を



文
小林金次郎
書
熊田大三

三丈瀧を見て、懸ヶ嶽
裏村道を経て檜枝岐へ

眼ざむれば窓より見ゆる森の白
障、庭邊平の花は深淵の中にほ
のぼと浮んでくる。それは森に
に、新氣風の拂掠する。傾く。森の
奥では啄木鳥が何處かを一人た
たいては、又たたく。

心地よい床の隅に、窓に見
た「もりあがをへる」の葉も、
しく、窓の隙に透られつゝ東
電針を出る。八時十分。これ

より平地を横ぎつて行けば、**龍巖**
の三山。**龍**、**弄佛**、**長嶺**もやが
て密林に被はれてゆく。約卅五
分にして「**陽春溫泉**」に着く、
こゝには今温泉が起てるべく發
して行った三十坪ばかりの小家
が一戸一人の大工によつてここ
つと作られてゐる。**温泉**と云つ
て湯の如くではなく、**酸氣**を
火でわかすのである。これより
檜の根を隨つて行けば約三分

小林金次郎

目イト見なされ
お駒の縁に
夏の白雪 飛び横切

イト豆なされ
梅の軒に
深山つばくら子を
解す

目イト見なされ
 陰の枝姫は
 モンヘ表で嫁にゆく

ロイト見なされ
長御ケ玉に
跡れつちさの おぼろ月

(七月二十八日 險枝岐村)
丸屋にてつくる

鉄の裏林道となる。

◆三才さんさいは全くすばらしい奇國である。幅は十間位、高さは俗に三十丈と稱してゐる。大きな

い石を投げて、何十秒を要するのだから、可成り遅くして正確なる露さを知ることができない。水量は露分當量にあり、邊りの森林と對照して、銅天地へ来たかの眼がある。分れ路に新らしく私たちの手により指標表を立て

の印となつてゐる。こゝで蜜食を取り、午後一時出雲。上流約三十里を左へ曲れば扇園五間もあらうと思はれる神代無樹が天を衝いて立つてゐる。一時四十分留左に新海の山々を景つゝ横田代、上田代を通り三池へ下る。へ行く道は約十里にして新海の小出、大湯温泉へ通ずる。

◆二時四十五分、角力取四代を出發ぎに登る際は必ず荷を下しこの地で角力を取るのだと言ふ。三千尺の頂上に肉を咀嚼す

◆兩幹事は私たちをして眞に
人間の運命を知らしめる。登々
あれば下りあり、谷あれば又谷
あり、大密林あれば花畑あり、
若きものは一度この地に来りて
社会の世相を直經すべきであら
う。七入に驚けば翁の家あり遊

田代は湿地を意味するもので、先づ田のへりのくしやくしやしたところと思へばよい。この邊りには半雄殿位の水芭蕉が一面に生え茂り、とげだらけの笹が「島」とまらずが私たちの袖をとらへて離さない。この邊より左

ことの如何に快なるかをおもふ
この頂上は又一面陽地、赤と
紫の花が一面咲き競れ、彼方に
緑の森林あれば、此方は天然の
風景林あり、浮島あれば鬱島あ
り、全くここに新天地が展開し
てゐる。

書き進めた。終りにこの村の子
守唄を一つ

ホヤヤレ　ホヤヤレ
ボンボチエ（赤ん坊）　ボンボ
チエ

スケツチ「三條ヶ淵の壯観」

スケッチ「三條ヶ淵の壯観」

駒ヶ嶽より大桃へ

「駒」 檜枝岐温泉観光協会提供



画「駒ヶ岳の偉容とその帰路」

第七信 七月三十一日
午後八時九分を出る。この日の同行者は丸屋主人で、梅枝崎の屋敷に美雄氏であるが、同宿の密林局長手野田勇氏、田中三枝氏など村の青年巡視を併せて十一人である。

八時二十分、小峠の荷を置いて、辨當と宿からやつと分けて買った白砂礫、と言つても灰色の砂糖へもつともこの村で砂礫は固く貴重なものとなつてゐる。大事にもつて登る。天気はまあ良い方、麓から中腹までは殆ど大樹の密林でこの間の急峻を登るのである。麓の急峻を登りよりは楽としても、連日の峠越しや登山に足は伸び、運ばない、とすると後へ引を戻されてゆく。九時四十五分頃「秘湯」の

途上・点描⑩
駒ヶ嶽より大桃へ

文 小林金次郎
書 熊田 大三



南會の神秘境
る探を



ある所へつく。流水はこれより約五十間下ると、懸崖から冷たい影を落してくるのである。ニームの水に砂礫を入れて濾過の氷水を作つて、懐かしい鰯の長谷飯を思ふ。これより針葉樹の村となる。道は大第に低に開かれ、目を突き刺すをきる程の雲を分けつゝ大第に登る。

◆十時五十分頃、麓がばつと開けて駒ヶ嶽の頂上が見える。こゝらよいお花畑となり高山植物として有名な「つまとり草」「なんきんこざくら」「ちんぐるま」「しよるうじようばかま」「姫岩鏡」が一面に咲き散らばる。ゆくゆく万葉雪がありこれをがりがり噛みながらお花畑を歩する。

◆二時四十分頃につく上下約四里心身共に如く一歩出る元氣もなし。然しこれより三里半の向ふに宿がある。雨具を用意して大桃の里に向ふ。檜枝岐川を左にし右にこれに添ふてゆけば景色は頗る良きも人家は更になし。

スケッチ 駒ヶ岳の偉容とその帰路